

思 春 期 の 諸 問 題 に 関 す る 研 究

稲村 博 (筑波大学社会医学系)

S 5 8 年度については、多方面の研究を行ったが、主な点について項目をあげながらまとめると次のごとくである。

I 思 春 期 問 題 の 臨 床 的 研 究

まず一つは、思春期問題の臨床的研究である。思春期問題は大別すると二つあり、一つは問題行動、もう一つは精神疾患である。いずれも今日増加しているが、これら両面について臨床的な研究を行った。まず問題行動については、家庭内暴力、登校拒否、非行、自殺、薬物乱用などについて、外来治療と入院治療を実践した。これらを通して、各問題の治療法を研究し、従来、心の絆療法として工夫していた方法を各問題別に適用したのである。その結果、大筋ではほぼ似ているのだが、問題別に治療技法の諸要素のうちウエイトのおき方に多少差をつける必要のあることが明らかとなった。

とくに、入院治療に大きな進歩が得られ、「思春期病棟における短期入院療法」がほぼ確立した。これによると、こじらせて病的特徴を加味している家庭内暴力や登校拒否など、その多くは稲村が「思春期挫折症候群」と呼んでいる病態なのだが、これは従来治療がきわめて難しいとされていたのを、2～3カ月の入院で9割以上が改善するという成果を得た。画期的なものと思われる。

いっぽう精神疾患についても、上述の「思春期挫折症候群」との関連で治療技法の改善を試み、やはり成果を得ることができた。なお、年間に外来と入院で扱った思春期問題の事例は500例を越えた。

II 親 子 関 係 及 び 家 庭 教 育 の あ り 方 に 関 す る 研 究

もう一つは、上の思春期に関する研究から誕生したものである。問題事例を検討すると、乳幼児期からの親子関係や家庭教育のあり方にそれぞれ何らかの問題が認められた。そこで、問題別にそれらを整理し、どのような特徴やパターンがあるか、どの時点にどうした対策を講ずれば問題が防

がれるかなどをまとめた。その成果の一部は、S 5 8 年 1 1 月に国立婦人教育会館で「国際家庭教育セミナー」が催された際、日本の代表として加わり発表し、広く注目を集めた。

III 適 応 と 文 化 摩 擦 に 関 す る 研 究

もう一つは、適応と文化摩擦に関する研究である。このテーマについては、もう6年間ほど系統的研究を続け、これまでは、海外在住邦人の不適応現象とその対策を東南アジア、南北アメリカ、ヨーロッパなどで行ってきた。今年度は、主として海外から帰国したあとのいわゆる「逆不適応現象」と、それから在日外国人の不適応現象について調べた。前者では、昨年度に主として成人を調査したので今年度は主として子どもについて行ったほか、とくに注目される帰国後の中国残留孤児の追跡調査も進めた。また後者については、子どもと大人の両面で試みた。いずれもきわめて貴重な結果を得ている。

IV 自 殺 防 止 と 危 機 介 入 に 関 す る 研 究

次の一つは、自殺防止と危機介入に関する研究である。今年度は主として「いのちの電話」で行った事例の検討を進めたが、性、年齢、職業、地域、家庭環境などの異なるさまざまなタイプの事例について、とくに対応困難なものをまとめ、その対策をはかった。これまでの研究でほぼ通常の対応法はできているわけだが、困難例の検討に焦点をおいたわけである。

V 交 通 事 故 対 策 と 安 全 教 育 に 関 す る 研 究

このほか、主として筑波地区における交通事故対策と安全教育に関する研究を行った。この地域が事故多発地帯であるうえ、近年は幼少児と老人の人身事故がふえているためである。これについていくつかの基本的知見を得たが、さらに次年度継続する予定である。